

アイヌ口承文芸テキスト集 20
白沢ナベ口述
ユカライルパイェ 若イシカラ人との決闘

採録・訳・註 中川裕

キーワード：アイヌ語、口承文芸、英雄叙事詩

このテキストは、千歳市蘭越出身の白沢ナベ氏(1905-93:戸籍上は1906-)の語りによる **yukar irupaye** 「英雄叙事詩の散文語り」で、1988年4月4日に白沢氏の自宅において録音したものである。整理番号は N8804043YR。白沢氏の父親である小山田サンレキテ氏から聞いた話だということである。

あらすじ

私はシヌタツカのポイヤウンベである。ひとり暮らしで、狩りの名手であった。ある日山に行くと、小山に手足をはやしたような大きな熊に出会ったので、それを獲って解体していると、どこからか空が割けるような音がして、男がやってきた。見たことがない男だが、若イシカラ人であるらしく思った。私が男の方を見もしないで一生懸命に解体をしていると、男は私のそばにやってきて、

「俺が獲ろうとしていた獲物だったのに、誰だか知らないが俺の邪魔をしやがって」と言ったが、聞こえないふりをして解体を続けていると、腹を立てて木を切ってきて棍棒を作り、その上に顎を乗せて「死にたくなかったら、お前の刀に獲物を添えて償いの品として出せ」と言う。

聞こえないふりをして解体を続けていると、棍棒を振り上げて私を打とうとするので、私は鹿の腹の中に飛び込んでそれを避け、また飛び出して解体を続けた。男は再び杖を振り上げたが、私は鹿の腹の中に飛び込んでかわし、また飛び出した。そして鹿の糞袋を裂いて、腐った糞をつかみ出し、男の半面に投げつけた。男は怒ってまた杖で叩こうとするが、それもまたかわした。

男はますます腹を立て、佩いている太刀を引き抜いて攻撃してきたので、私も刀を抜いて、本格的に応戦した。敵は身軽に飛び回り、私は彼を切ることができず、彼も私を切ることができなかった。彼は私の動きに感心しながらも、「どのようにしようとも、生き延びられるなどと思うな」と言って攻撃をしかけてくる。

私が高い枝は枝の下に飛びつき、低い枝は枝の上に飛びついて刀をかわすと、彼は高い枝低い枝を切り刻み、枝の落ちる音が響き渡る。私が刀をふるうと、高みを通る刀影は舞い降りる炎となり、低みを通る刀影は跳ね飛ぶ炎となって、あたりに炎を巻き起こす。彼は大きな山を登って逃げていき、私は後を追ったが倒すことができない。

すると、狩場の中ほどで今度は彼が反撃してきた。私は山の中腹から鳥が空を飛ぶように飛んで、地上に降りた。そしてまた戦ったが、決着が着かないでいるうちに、彼がこう言った。

「立派なヤチダモを背にしてお前が立ったら、私がお前の腹を切り割くという、肝の割き合いの決闘をしよう」と言う。大声で承諾の返事をしてヤチダモを背にして立つと、彼は私の腹に刀を突きさし、上から下から切り割いたので、はらわたが出て体から引きずるような有様だ。腹を立てた私は、相手にも同じことを要求し、お互いに腹を割き合ったが決着がつかなかった。そこで、彼はこう言った。

「今回の出会いは遊びの出会いだ。次に会った時が本当の出会いなので、俺はもう帰る」と言って天を見上げると、激しい風が吹きおろして、彼はつむじ風に乗って飛び去ってしまった。私も自分の憑神に家に連れ帰ってくれるように頼み、つむじ風に乗ってシヌタブカの我が庭に運んでもらった。私の傷は上端、下端が沸き立つように膿んだが、わずかの間に治って元の姿を取り戻し、生き延びることができた。

風の噂に聞くと、私を襲ったのはやはり若イシカラ人で、彼はイシカラに戻った後も、傷が膿んで、瘡蓋になるところは瘡蓋になり、そのまま長いこと寝たきりであったという。そしてやっと治ったという噂だが、そうだとしたらとっくに治っている私の勝ちだと思って暮らしていた。そのうち私は美しい女性を妻にしたが、妻は大変な働き者で、畑仕事をしてもたくさんの収穫を得て、ふたつも三つも倉を建てるほどである。

考えてみてわかったのは、昔は私にも父や母がいて、父の妹がイシカラ人に嫁いで、そこから生まれたのが若イシカラ人であったのだが、お互いそれと知らずに戦ったのだった。その時彼は「次の出会いが本当の出会いだぞ」と言って別れたのだが、それきり向こうも来ないし、私も行こうとしなかったので、それ以来会うこともなかった。

そのうち、妻は男の子も女の子も大勢産んで、男の子には私が男の仕事を教え、女の子には妻が女の仕事を教えた。子供たちは大きくなって鹿や熊や魚をたくさん獲ってきてくれ、何を食べていとも何を欲しいとも思わず暮らしているうちに、今や年を取った。

そういう境遇にある私はシヌタブカのポイヤウンペだが、このようなわけで自分の弟であるイシカラ人と戦って、お互いに相手を倒すことができず別れたのだが、それきり再び会うこともなかったのだ。ということをお子たちに語り伝えておくのだ。

解説

yukar「英雄叙事詩」と呼ばれるものは、repni と呼ばれる「拍子木」でリズムをとりながら、節をつけて歌うように語っていく文芸として知られているが、白沢氏によると、千歳地方では節をつけて語るのは男性に限られ、女性は uepeker「散文説話」と同じように、節をつけないで散文で語るようになっていたということである。これを白沢氏は yukar irupaye と呼ぶ。rupa の語源はおそらく ru「溶けた」pa「口」で、節をつけた語り方に対し、その韻律の枠をはずして（溶かして）散文として語る語り方を rupa「溶けた口調」と呼ぶのだと思われる。ye は「～を言う」であり、rupaye だけで「散文語り」という意味で用いられる地域もあるのだが、ここでは不定人称接辞の i がついている。これはおそらく i-yup-ne kur「その・兄・である 人」＝「年上の方の人」という場合の i と同じような用法であると考えられる。つまり、i はいくつか候補のある何か—この場合は yukar の語り方—を指しているのであり、そのうちの散文である方ということ irupaye で表しているのではないかと思われる。

このようなわけで、この物語は語り方としては uepeker のような散文形式だが、内容的にはシヌタプカのポイヤウンペを主人公とする yukar に他ならない。構成的には非常に簡単で、若イシカラ人と偶然出会ったポイヤウンペが、自分の従弟だとは知らずに死闘を繰り返すことになり、決着がつかず再戦を期して分かれるのだが、その後再び相まみえることもなく年老いたという話である。yukar らしく、随所に韻文的な常套表現がちりばめられている。

この物語で重要な点は、シヌタプカとイシカラの関係である。イシカラは現在の石狩地方を指すと考えられているが、日高・胆振地方にかけて語られる yukar には、イシカラ人が絡んでくる話がたくさんあり、多くの場合、同じ yaunkur「陸の人」＝「北海道人」であるにも関わらず、敵対関係にあることが多い。

yukar の中でも最も知名度の高い「虎杖丸の曲」でも、この発端は黄金のラッコを捕まえた者に自分の妹を嫁がせるとイシカラ人が言ったことで、勇者たちがラッコ争奪戦をしているところにポイヤウンペが割って入って、ラッコを獲ってシヌタプカに持って帰ってしまったことにある。それが原因となってイシカラ人+レプンクル連合軍とシヌタプカの間で戦闘が起こり、それからそれへと戦いが連鎖していくのである。

その一方で、シヌタプカとイシカラの間に、もともとなんからの縁戚関係があることを示すような表現も垣間見られる。「虎杖丸の曲」には五人の異なる話者によるバージョンがあるが、そのひとつの平賀ヤシ版では、ポイヤウンペの育ての兄と姉が、イシカラ人のことを a=wenkoryupi「われらの悪い兄」とか、a=wenkoraki「われらの悪い弟」と呼んでいる。同じ人物を兄と呼んだり、弟と呼んだりしている点については、訳者の萩中美枝が「前には、yupi（兄）と呼んだ同じ人

物を今度は aki (弟) と言ったのは、実齡が多くても軽んじたからで、実齡が若くても、尊敬の意味をもって、兄さん、姉さん、と呼ぶことは多い」(北海道教育庁社会教育部文化課編『久保寺逸彦ノート』1987: 18) と注記している。

ただし、親しい間柄であれば、血のつながりがなくても「兄」とか「弟」と呼ぶことも普通にあるので、このように呼んでいるということだけでは、血縁関係にあるとは言えない。しかし本編では、ポイヤウンペが自分の父親であるシヌタプカ人の妹、つまり自分の叔母がイシカラ人に嫁いで生まれたのが、pon Iskar un kur「若イシカラ人」である—つまり自分の従弟であると明言している。この親の世代のイシカラ人とシヌタプカ人のような関係は、yukar 中には度々描かれるもので、両者の同盟関係を表していると考えられる。つまり、ポイヤウンペの親の代においては、シヌタプカとイシカラは親戚であり、かつ同盟関係にあったわけであるが、それが息子の代になるとお互いが会ったことも無い関係になっているというのは、どのような設定と考えられるだろうか？

yukar の主人公は必ず親がいないことになっており、本編でもひとり暮らしであるところから話が始まっている。両親がいないということと、親の代に交わされていた同盟関係が解消されているということは、もちろん関係が無いわけがない。なにがしかの戦争があって、そこで両親が命を落とすことになり、その際に同盟関係が壊れるような何かが起こったと考えるのが自然であろう。そして何かというのは、イシカラ人が裏切って敵側と手を組んだという話が、もっともわかりやすい。

「虎杖丸の曲」では、イシカラ人はシヌタプカと敵対しているレブンクル勢と手を組んでいる。中でも平賀ヤヤシ版では、ヤヤシ自身のもと思われる注で、イシカラ人の妹であるイシカラ姫が、レブンクルの中心人物であるカネサンタ姫の「実妹」であるということが示されており、そのカネサンタ姫とイシカラ姫が共謀してポイヤウンペを殺そうとする場面も出てくる。

すなわち、シヌタプカとイシカラの間には、同盟関係時代、同盟解消時代、敵対関係時代という、少なくとも三つのフェーズが考えられるわけである。異なる地域の異なる話者による、それぞれ別の話をひとまとめで論じるのはいかなるものかという意見も当然あるだろう。しかし、いろいろな人から伝承された数多くの物語を聞いたり語ったりしていた人々が、そこに登場してくる同じ名前のキャラクターに対して、全くその話ごとの独立した存在として考えていたというほうがむしろ不自然であり、その役割についてなんらかの共通した認識を前提として持っていたと考えるほうが自然であろう。

つまり、イシカラ人というのはかつて同盟関係にあったが、その裏切りでポイヤウンペの親であるシヌタプカ人夫妻が命を落とす羽目になったということで、何かあれば一触即発の関係にあ

る、そんな立場のキャラクターとして、さまざまな話に登場するのだと考えると、本編だけでなく、北海道西部に伝承される yukar と称される一群の叙事詩が良く理解できるのではないかと思われる。

テキストの表記法について

アイヌ語テキストの表記中、= (イコール) は、その前あるいはその後にあるものが人称接辞であることを示す。_ (アンダーバー) を付したものは、その前の音素が交替して別の音素になっていることを示す。例えば、cise or_ ta → cise ot ta, an=an w_a → an=an ma。h_i や y_ak のような例では、h や y が脱落することを示す。... とあるのは、単なるポーズ、言いよどみを表すのではなく、その後で明らかに別の語句に言い直したと思われる場合に付す。* seko ... のように、* を付したのは、言いさしなどで単語として成立していない形であることを表わす。<ne> のように<> で示したのは、発話の最後の音節を繰り返す形で、次の発話までの間をとる語用上の形式である。

日本語で語られている部分はひらがな表記で示してあるが、日本語で語っている場合と日本語起源のアイヌ語として語っている場合の区別は困難である。後者の場合はアイヌ語としてローマ字表記で表してあるが、その判断は感覚的・恣意的なものであることをお断りしておく。

註はページごとに脚註の形で示した。脚註等における N9109211FN のような記号は、私の採録した資料の整理番号である。N(白沢ナベ) 91 (1991年) 09 (9月) 21 (21日に録音した) 1 (一番目のテープに収録されている) ことを示す。FN はフィールドノートの意味で、録音全体を聞き起したものを指す。また YR は英雄叙事詩 (yukar) のテキストであることを指す。

参考文献略称

『アイヌの叙事詩』: 鍋沢元蔵筆録、扇谷昌康脚注 (1969) 『アイヌの叙事詩』 門別町郷土史研究会

『久保寺辞典』: 久保寺逸彦 (2020) 『アイヌ語・日本語辞典稿』 草風館

『沙流方言辞典』: 田村すず子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』 草風館

本文

Sinutapka un kur a=ne wa	私はシヌタプカ人で
an=an ruwe ne hine <ne>	あり
ekimne=an kor tup sumawe a=eawnarura ¹ .	山へ行くとたくさん獲物を獲っていた。
sinen a=ne wa an=an pe ne kusu	ひとり者であったので
tup sumawe a=eawnarura	二つの獲物を獲り
rep sumawe a=eawnarura.	三つの獲物を獲った。
soy ta ka cise or_ ta kam kuma tay	外にも家の中にも肉の干し竿
cepkoyki=an kor cep kuma tay racitke ² .	魚を捕ると魚の干し竿がぶら下がり
piye uske osumtapes kor okay kane <ne>	肥えたところが油をしたたらせていて
poronno usa kamihi usa cepihi soy ta ka	たくさん肉や魚を外にも（干し）
cise or_ ta a=satke hi	家の中に干したものが
ikasma wa soy ta ka a=satke wa	余ると外にも干して
soy ta ka kam kuma tay poro kuma tay	外にも肉の干し竿大きな干し竿の列
cep kuma tay poro kuma tay an ruwe ne hine	魚の干し竿大きな干し竿の列があって
oka=an ³ ruwe ne a korka	暮らしていたのであったが
sineanpeta ekimne=an kusu	ある日狩りをするために
kim ta arpa=an akusu, poro kamuy	山に行くと、大きな熊
pon nupuri cikir a=uste tek a=uste apekor an	小山に足や手をはやしたような
poro kamuy a=tomot hine a=rayke hine	大きな熊に出会って殺して
a=ri kor an=an akusu	解体をしていると

¹ tup sumawe a=eawnarura : すぐ後に出てくるように、tup sumawe a=eawnarura, rep sumawe a=eawnarura 「二つの獲物を家に運び、三つの獲物を家に運んだ」という常套的な対句で、「たくさん獲物を獲った」ということを表す。ここでは、sinen a=ne wa an=an pe ne kusu という一句を先に言うべきであったのを、ここに挿入したので、対句が途中までになったために、後で言い直したのであろう。

² racitke : racitke は「ぶら下がる」という意味で、本来 cep 「魚」や kim 「肉」などを主語にして使う動詞であり、本文のように kuma tay が主語の場合、白沢氏は他の話では orasnacitke 「～に（魚や熊の肉が）どっさりとぶら下がる」という動詞を用いている。

³ oka=an : 主人公は一人暮らしなので、単数形 an=an となるべきところだが、多くの話では家族がいるので、こういう場面では複数形になることが多い。それでここも oka=an としてしまったのだらう。

inehuy kotan inehuy mosir	どこの村だかどこの国だか
puskosanu yaskosanu	空が割けるような音がした。
kamuy ek hum ⁴ kewrototke <ke> hine	カムイが来る音が轟々と響いて
i=sam ta hacir wa, a=nukar akusu	私のそばに落ちたので、見ると
a=eramuskari p iki korka	見たこともない者ではあるが
pon Iskar un kur ⁵ ne noyne a=ramu korka	若イシカラ人らしいと思ったが
hetari pentok hosari pentok a=yaykoseske	私は頭を上げも振り向きもせず
一生懸命 yuk ⁶ nis ta ⁷ terke=an kane	一生懸命に鹿の上半身の方へ跳ね
yuk pannis ta terke=an kane	鹿の下半身の方へ跳ねて
iri=an kor an=an akusu <su>	解体をしていると
i=sam ta ek hine <ne>	私のそばにやってきて
"a=rayke kusu ek=an a kamuy ne ⁸ etok	「俺が獲りに来た熊の前に
ne kotan kor pe ne mosir kor pe	どこの村の者だかどこの国の者だか
i=etok wente kusu rayke ruwe ne ya?"	俺の邪魔をして獲ってしまったのか
sekor hawean kor i=kocaranke korka	と言いながら文句をつけてきたが
caranke ka a=nu ruwe ka isam no	文句を聞きもしないで
mosma no an=an.	黙っていた。
orano iri=an kor an=an akusu <su>	そして解体を続けていると
konto iruska yuppa hine <ne> arpa wa	彼は頭にきて（どこかに）行って
kanni tuye wa ek hine	棍棒を切ってきて
poro kanni, esisuye humi pirka kanni	大きな棍棒、振り回し具合の良い棍棒を

⁴ kamuy ek hum : yukar 中の登場人物は、人間であるかカムイであるかわからないような存在であり、登場する時もカムイのような轟音を立てて空を飛んでやってくることが多い。なお、このような場面でのカムイという語の使い方については、遠藤志保 (2015) 「アイヌ英雄叙事詩におけるカムイという語の一用法」『口承文芸研究』38号 (94-107) に詳しい考察がある。

⁵ pon Iskar un kur : この場合の pon 「小さい、若い」というのは、親である Iskar un kur に対して「子供の方の」ということを表している。

⁶ yuk : kamuy 「熊」を獲ったはずだが、ここからはずっと yuk 「鹿」を解体していることになっている。

⁷ yuk nis ta : すぐ後の yuk pannis ta との対比を考えれば、ここは yuk pennis ta となりそうなところだが、白沢氏は他の話でも pannis は使っていても pennis は使っていないので、あるいは pennis は白沢氏の語彙の中には無いのかもしれない。

⁸ ne etok : 実際の発音は netok と聞こえる。こう解釈したが、この ne が文法的にどういう意味になるのかは不明。

kor wa ek hine	持ってきて
esirotké wa kasi notomare ⁹ wa	地面に突いてその上に顎を乗せ
itak haw ene an h_i <ni>	こう言った。
"e=ray kopan ciki	「死にたくなかったら
*e=kime ...	お前のか…
e=kimemutpe ¹⁰ yuk kotama wa	お前の刀を獲物と一緒に
i=koasinke ki kusu ne na."	償いの品として差し出すんだな」
sekor kane hawean korka	などと言うのだが
a=nu ruwe ka a=nu humi ka isam	私は聞こえない
apekor an=an w_a	ふりをして
iri a=eyaymonpokusmak	解体にいそしんで
kor an=an akusu <su>	いると
"e=inu he ki, somo he ki ya?"	「聞いているのか、いないのか？」
sekor hawean kor ne ...	と言いながら
nea kuwa ... nea kanni eriknasuye hine	その杖…その棍棒を振り上げて
a=i=kik kuni tukarike ta	打たれる直前に
yuk ossi a=osma tek hine <ne>	私は鹿の腹の中に飛び込んで
konto kuwa ¹¹ etaye wa	男が杖を引っこめて
kasi notomare etoko ta	その上に顎を乗せる前に
やっと ¹² hopuntektek=an hine	ぱっと飛び出して
また一生懸命	また一生懸命
iri=an kor an=an akusu <su>	解体を続けていると
kanna ruyno i=kik kusu	また激しく私を叩こうとして

⁹ esirotké wa kasi notomare : 「地面に突きたてて顎を乗せる」。この動作は通常 kuwa 「杖」でやる行為で、kanni 「棍棒」はこの行為を行うには短すぎる。そのためにこの後 kuwa を振り回したことになるのだらうと思う。

¹⁰ e=kimemutpe : 実際にはこのように発音しているが、後で聞きなおしをした時には、e=kimomutpe だと訂正している。これは tasiro のことではなく、「ekimomutpe っていったら、刀さしていったわけさ。ナタから、ナタっていか tasiro さし、makiri さし、そのほかに刀さしていったやつ、その刀欲しいっていうわけさ」(N8804042FN) ということだそうである。

¹¹ kuwa : kanni で打とうとしていたはずなのだが、この後はずっと kuwa 「杖」になっている。

¹² やっと : 北海道方言。「さっと」とか「ぱっと」という意味。

"ene poro ruwe an pe hunak or wa nukar wa
a=kik ... a=kik ka somo ki no
suy iri kor an siri ene an h_i."
ってゆって iyokunure kor iyokunure wa
iyokunure kor an korka
a=nu ruwe ka isam no <no>
iri a=eyaymonpokusmak hine
a=eyaymonpokusmak akusu
kanna ruyno <no> kuwa eriknapuni hine
toy kikkar noyne ne wa kusu
yuk ... yuk ossi a=osma tek hine
yuk kik humi sinrimkosanu.
hopuntektek=an.
kuwa etaye etok ta hopuntektek=an w_a
a=ri kor an=an.
suy iri=an kor an=an akusu
kuwa etaye hine ora ene hawean h_i.
"iyoasitomare ene poro ruwe an pe
a=kikno humi ne kunak a=ramu kor
a=kik hikeka, a=kik orawki"
sekor hawean kor
iyokunure wa kusu ... kor an korka
mosma no an=an ayne <ne>
yuk ossi a=sanke.
yuk honihi a=yasa hine
kamuy¹³ honihi a=yasa hine <ne>
siyehe ... yospehe¹⁴ a=opusi hine

「このでかい奴がどこから見ていて
俺が叩けないでいるうちに
また解体をしてやがる」
と言って驚きあきれて
驚いていたが
聞きもしないで
解体にいそしんで
手を動かしていると
また激しく杖を振りあげて
ひどく叩こうとするので
私が鹿の腹の中に飛び込むと
鹿を叩く音がどすんとした。
私はぱっと飛び出した。
彼が杖を引っこめる前に飛び出して
解体をしていた。
また解体をしていると
杖を引っこめてこう言った。
「驚いた。こんな大きなやつなのに
ぶったたこうと思って
殴っても、かわしてしまう」
と言いながら
驚いていたが
私は何も言わずにいて
鹿のはらわたを取り出した。
鹿の腹を割いて
熊の腹を割いて
糞…糞袋をやぶり

¹³ ここで言い違えていたことに気がついて、yuk を kamuy と言い直したようである。

¹⁴ yospehe : yospe は通常「胃袋」を指すのだが、『沙流方言辞典』では「動物（獣類）の「くそぶくろ」という説明もされている。ここでも中から糞を取り出すのであるから、「糞袋」という訳のほうが合っていそうである。

si askor ¹⁵ a=esikari hine	糞の腐ったのをつかんで
annanorke a=kosuykar	顔の片側に投げつけた。
a=esirkik a=koyapkir akusu	激しく叩きつけて投げると
annanuhu si patek koyanrasne.	顔の片側が糞だらけになった。
ki akusu po anakne iruska wa	するとますます怒って
"ene a=kikno humi an pe ray ka somo ki no	「あんなに強く殴って死にもせず
i=esinot siri ene an h_i"	こんなふうには俺をからかうのか」
sekor hawean kor	と言うと
kanna ruyno <no> kuwa epuni wa	また激しく杖を持ち上げて
i=kik したけども	私を叩いたけれども
yuk ossi a=osma tek wa	私は鹿の腹の中にさっと飛び込んで
yuk kik humi sinrimkosanu.	鹿を叩く音がどしんと鳴った。
orowa suy	するとまた
“やっど hopuni やっど hopuni	「さっさと出てこいさっさと出てこい。
tunasno hopuni=an w_a. ¹⁶ ”	早く俺が立ちあがって」
sekor ye kusu ne a p	と言おうとしたところで
hopuni=an wa orano iri=an ...	私は飛び出て解体を始め
yuk a=usasnere ¹⁷ kor an=an akusu	鹿を切り裂いていると
いよいよ iruska hine	彼はますます腹を立てて
"e=kimemutpe yuk ekotama wa	「お前の刀を鹿と一緒に
i=koasinke somo ki yak anakne	俺に償いの品として出さなければ
nep siknuhu, nep tusaha	生きることも、無事であることも
e=ki ka somo ki p ne ruwe ne hike	できはしないのに
nep a=ye yakka e=nu ka somo ki"	何を言っても聞こうとしない」
sekor hawean kor mut emusi sikoetaye	と言いながら、佩いている太刀を抜き

¹⁵ askor : askor は「酒」の意味でも使うが、この場合は「発酵したもの」という意味であろう。

¹⁶ tunasno hopuni=an w_a : 意味の取りにくいところだが、「出てこなければ、お前より早く俺が立ってぶったたいてやるぞ」というようなことを言おうとしているのではないか？

¹⁷ a=usasnere : usasnere は usa 「いくつもの」 ser 「部分」 ne 「である」 -re (使役) = 「細かく切り分ける」という意味だと考えられる。ser は『沙流方言辞典』に「部分、一部」とあるものと同じであろう。

i=tuye kusu ne *seko ... i=tuye kusu ne ¹⁸	(私を) 殺してやる…切ってやる
sekor hawean kor	と言いながら
mut emusi *esikkan ...	佩いている太刀を
esikannatki kor i=kocorawki wa	振り回しながら攻撃してきて
a=ruska kusu	私は腹が立ったので
a=mut emusi a=sikoetaye.	佩いている太刀を抜き
orowano <no> sonno ukoyki, sino ukoyki	真剣な戦い、本気の戦いを
emus ani	刀で
emusukoyki=an ¹⁹ ruwe ne <ne> korka	刀勝負を行ったのだが
nep enepo sicari wa sirki ya ka	なんとまあ(相手が)大暴れすることか
a=eramuskari <ri>.	わからないほどである。
kosne terke kosne hopuni	身軽に跳ね、身軽に飛び
eyaytapkurkaoma kane an rapoki	楽々と身をこなすのに
a=kar ²⁰ kuni a=niwkes kusu	私は手をかけることもできないので
orowano asinuma ka a=mut emus	私も佩いている太刀を
a=esikannatki kor ukoyki=an ruwe ne korka	振り回しながら戦ったのだが
a=tuye ka niwkes	相手を切ることもできず
i=tuye ka niwkes akusu	相手が私を切ることもできずにいると
orowa ene hawean h_i <ni>.	彼はこう言った
"sonno sino ne kotan kor pe	本当にどこの村の者
ne mosir kor pe e=ne wa	どこの国の者であって
e=asuru ka isam w_a	噂も聞いたことがない奴が

¹⁸ i=tuye kusu ne sekor hawean : 直接話法なら “a=e=tuye kusu ne.” sekor hawean となり、間接話法であれば i=tuye kuni ye となる。中間話法というべき用法である。

¹⁹ emusukoyki=an : tam-e-koyki 「刀・で・戦う」、kanni-e-koyki 「棍棒・で・戦う」というような語構成の動詞もよくあるが、ここは『アイヌの叙事詩』p.239にある emusi ukoyki/ ki p tapan wa 「太刀の戦い/するものなのに」にあるような名詞+名詞 (<自動詞) という合成名詞から、さらに自動詞化したものだと考えられる。

²⁰ a=kar : kar は通常「作る」と訳されるが、kinakar 「(刃物を使って) 山菜を採る」や putaha kar 「蓋を閉める」といった用法から、「対象に何らかの変化を与える」というのが原義だと考えられる。したがって、ここでは前後の文脈から、相手に手傷を負わせることを表していると考えられる。

orowa ene e=sicari siri an h_i ne ya"	このように奮闘するものか]
sekor hawean.	と言った。
"neun e=iki hi kusu	「どのようにしようとも
pon siknu po e=ki kuni ramu"	生き延びることなどできないと思え]
sekor hawean kor orowano <no>	と言うと
sirkorkamuy rikun niteke ranke ni ...	立木の高い枝、低い枝…
rikun niteke ni tuypoki a=kotukkotuk.	高い枝は枝の下に私は飛びつき
rikun niteke ²¹ ni tuykasi a=kotukkotuk	低い枝は枝の上に飛びついた。
orowano <no> sirkorkamuy rikun tekehe	すると相手は立木の高い枝
ranke tekehe tawki wa tuypa wa <wa>	低い枝を切り刻み
nitek horak h_um royse kane kor	枝が落ちる音を騒がしく立てながら
orowano <no> ukoyki=an ayne	戦っているうちに
makanan kor ²² terke kuni	時には跳ねることも
hopuni kuni a=eaykapte.	飛ぶこともできなくした。
a=tam ka konna sikayekaye.	私の刀は稲妻のように
rik kus tam kur_ rapse nuy ne ²³ .	高みを通る刀影は舞い降りる炎となり
ra kus tam kur terke nuy ne	低みを通る刀影は跳ね飛ぶ炎となり
an=eonuytapukte ²⁴ kane <ne> ki ayne	あたりに炎を巻き起こしていると
kamuy nupuri, nupuri turasi kira wa hemesu	大きな山、山を登って逃げていく

²¹ rikun niteke : ここは ranke niteke 「低い枝」とあるべきところ。

²² makanan kor : 『沙流方言辞典』に「マカナン makanan 【副】 [雅] どのように。 makanan ne kor マカナン ネ コロ [雅] 時によると。 makanan ne kor/ranke mosir/mosirso kurka/ ciorankekar マカナン ネ コロ/ランケ モシリ/モシリソ クルカ/チオランケカラ [雅] 時によると下界の国の国土の上から下りて来ます。《Sユーカラ》」とある。それと同じものと考え、ここはそれまで防戦一方だったのが、「時を見て」反撃に転じた、ということを表しているのだと考える。

²³ rik kus tam kur_ rapse nuy ne : 『アイヌの叙事詩』 p.527 では、 ra kus tam kur 「下行く太刀影は」 / rapse nuyne 「飛び散る焔の如く」とあり、 rik kus と ra kus で逆になっている上に、 rapse の解釈もだいたい違うが、白沢氏には「鳥が下りてくる音」という意味で cikap rapse hum という用例もあり、 rapse nuy ne は上から下に炎が流れる描写だと考えて良いだろうと思う。

²⁴ an=eonuytapukte : an= (常套句等における a=の古い形の残存) e- 「～で以て」 o- 「～<場所>に」 nuy 「炎」 ta (強調) pukte 「たちわたらせる」か? pukte に関しては『久保寺辞書』 p.253 に「タチワタラス、立渡ル」とある。「刀を激しく振ることで、炎をあたりに巻き起こす」というような感じであろうと思う。

kira wa hemesu kor	逃げて登って行くと
kira wa hemesu yakka an rapoki	逃げて登って行くのだが
a=kar kuni a=niwkkes pe ne kusu	手にかけることができないので
orowano kese a=anpa.	後を追った。
rik kus tam kur_ rapse nuy ne <ne>	高みを通る刀影は舞い降りる炎となり
ra kus tam kur terke nuy ne.	低みを通る刀影は跳ね飛ぶ炎となり
an=eonuytapukte kor kese a=anpa.	炎を上げながら後を追った。
iwor epitta no <no>, iwor turasi iwor pes	狩場中、狩場を上手へ下手へ
orowa iwor_ turasi, iwor hontom pakno	狩場を上手へ、中ほどまで
kese anpa ²⁵ kor	追いかけると
orowa i=tamkocupu.	私に刀を振るってきた。
hosari=an kuni ka	振り向くことも
hekiru=an kuni ka i=eaykapte.	振り返ることもできず
orowano <no> rik kus tam kur_ rapse nuy ne	高みを通る刀影は舞い降りる炎となり
ra kus tam kur terke nuy ne	低みを通る刀影は跳ね飛ぶ炎となり
i=eonuytapukte kane	私に向かって炎を上げながら
orowano i=kimatekka.	私をあわてさせた。
aynu mosir mosir so kurka a=nukar kane <ne>	人間の国土の大地の上を見て
nupuri hontom wa terke=an kor	山の中腹から飛ぶと
suwanu cikap suwanuno kuni	獲物を狙う鳥が舞い降りるように
suwanuno cikap suwanu kuni ²⁶ a=sikopayar.	獲物を狙う鳥が舞い降りるかのように
mosir so kurka ...	大地の上に
aynu mosir mosir so kurka a=oran.	人間の国土の大地の上に降りた。
cikappo rew siri a=sikopayar.	小鳥がとまるかのように（降り立った）。
orowa suy iki wa iki p	そしてまた例のやつに
terke kuni hopuni kuni a=eaykapte	跳ねも飛ぶもできないようにさせて

²⁵ kese anpa : kese a=anpa となるべきところだが、このように言っている。

²⁶ suwanuno cikap suwanu kuni : suwanu は「(鳥が) 獲物を狙って舞い降りる」-no は動詞の意味を強める接尾辞だが、ここでは「そういう鷹のような強い力を持った鳥が舞い降りるように」という表現なので、suwanu cikap suwanuno kuni と言ってから、suwanuno cikap と言い直したものと思われる。

orowano wen ukoyki=an korka <ka>
 a=rayke ka niwkes
 i=rayke ka niwkes akusu
 orowa ene hawean h_i. ene an h_i <ni>.
 "tukno pinni ...
 mosir so ka ta tukno pinni pinni turasi
 e=as wa ne yakne <ne> a=e=senrototo.
 a=e=senrototo.
 usenrototo-ukoyki=an²⁷ kusu ne na."
 sekor hawean.
 a=ioeseciwre kor
 mosir so ka ta asno pinni
 pirka pinni a=yaykopaste as=an akusu
 orowano herikasi herasi i=otke wa
 i=senrototo ki p ne kusu
 a=ossikeop yaske hi_ne²⁸
 a=ninpaninpa kane sirki.
 iruska=an kusu
 "tane eani e=pinniekopas
 e=as kusu ne na.
 yakne neno a=e=kar kusu ne na"
 sekor itak=an akusu, i=oeseciwre kor
 mosir so ka ta asno pinni tukno pinni
 yaykopaste as wa kusu

激しく戦ったが
 私が彼を倒すこともできず
 彼が私を倒すこともできずにいると
 彼はこう言った。
 「立派なヤチダモ
 大地に生えた立派なヤチダモを背にして
 お前が立ったなら、私がお前を切り割く。
 私がお前を切り割いてやる。
 割り合いの戦をしようではないか」
 と言った。
 私は大声で承諾し
 大地の上ですくと立つヤチダモ
 立派なヤチダモに寄りかかって立つと
 彼は私を上から下から突き刺して
 私の体を切り割いたので
 はらわたが割けて
 体から引きずるようなありさまだ。
 腹が立ったので
 「今度はお前がヤチダモにもたれて
 立つのだ。
 そうしたら同じようにしてやるからな」
 と私が言うと、承諾の返事を返して
 すくと生えた立派なヤチダモに
 寄りかかったので

²⁷ usenrototo-ukoyki=an : senrototo は「切り裂く」。u-senrototo 「互いに・切り裂く」という自動詞が名詞化し、ukoyki と名詞+名詞（<自動詞）という形で合成名詞化して、さらに自動詞化したもの。註 19 の emus-ukoyki と比べると、前部構成要素が自動詞か名詞かの違いがあるが、同じ原理の語構成であることがわかる。なお、これは『虎杖丸の曲』で、usampetusmak 「心臓比べ」と呼ばれているものと同じで、「肝の割り合い」と訳すこともある。

²⁸ yaske hi_ne : 発音上は yaske ne と言っているのだが、ne は接続助詞 hine としか考えられないので、こう解釈しておく。

orano ene i=kar h_i ne kusu
 penramuhu a=sirkootke.
 orowano a=yasa wa a=raeta a=riketa
 i=koraci ossikeop yaske hi_ne *sitonkone ...
 sitomkote kane kor ukoyki=an ruwe ne korka
 a=rayke ka niwkes
 ray=an ka niwkes akusu
 ene hawean h_i.
 "tan unukar sinot unukar ne ruwe ne.
 kanna unukar anakne
 sonno unukar a=ne ruwe ne na.
 sekor kusu tane wano hosipi=an kusu ne na.
 eani ka e=hosipi kusu ne na."
 sekor hawean kor <kor>
 kanto kotor nukar kane hopuni wa rera ...
 iwor so ka wa tan ruy rera cisanasanke
 sipoye rera rera etoko a=ekosnekurpuni kane
 hunak un a=rura wa isam w_a kusu
 asinuma ka itak=an hawe ene an h_i
 "nep kamuye nep pitoho i=turen nankor y_a?
 i=turen kamuy inkar_ciki <ki>
 a=kor kotanu a=kor_cisehe
 i=orura wa i=korpore yan."
 sekor itak=an akusu
 nep enepo itak nu kuni p
 kamuy ne kusu
 kimun iwor so, iwor so ka ta ...
 ka wa sipoye rera cisanasanke.
 sipoye rera rera etoko a=ekosnekurpuni kane

私がそのようにされたことなので
 胸を激しく突き刺した。
 そして上へ下へと割り
 彼は私同様はらわたが割けて
 それを体にぶら下げながら戦ったが
 私は彼を倒すこともできず
 私も倒されずにいると
 彼はこう言った。
 「この出会いは遊びの出会いだ。
 こんど会った時が
 本当の出会いだ。
 ということなので俺はもう帰る。
 お前も家に帰れ」
 と言いながら。
 彼は天を見上げると飛び上がって
 狩場の上から激しい風が吹きおろし
 つむじ風の先に軽々と持ち上げられ
 どこかへと運び去られて姿を消したので
 私もこう言った。
 「何のカムイが私に憑いているのか？
 私の憑神が見ているのなら
 私の村、私の家に
 私を運んでください」
 と言うと
 何と人の言うことをよく聞くものが
 カムイであるので
 山の狩場の、狩場の上に…
 上からつむじ風が吹きおろした。
 私はつむじ風の先に軽々と吹き上げられ

Sinutapka ta a=mimtar ²⁹ ka ta	シヌタップカの我が庭に
a=i=rura ruwe ne hine	運ばれたのだった。
orowano a=pirkesehe, a=pirpakehe	そして私の傷の上端、傷の下端が
ukotattatce ayne	沸き立つように膿んだあげく
irukay ne kor pirka hine <ne>	わずかの間に良くなって
siknu=an ruwe ne korka	私は生き延びることができたが
a=ossikeop a=honihi	はらわたをお腹に
a=orarpa sekora he ne ya ... wa ³⁰	押し込んだということか？
inu=an kor, seta or peka	聞くところによると、犬の便りに
cikap or peka inu=an ³¹ awa	鳥の便りに聞くと
pon Iskar un kur iki hi ne wa	若いイシカラ人のしわざであり
orowa ne Iskar ta hosipi ruwe ne korka <ka>	彼はイシカラに戻ったけれども
pirkesehe, pirpakehe ukotattatce.	傷の上端、傷の下端が膿んで
cima kamu usi cima kamu wa <wa>	瘡蓋になるところは瘡蓋になり
orowano kasi ... kasi ehotke wa	その上に寝たきりで
tuno iwan pa, reno iwan pa	ふたつの六年、みっつの六年
mata iwan pa, sak pa iwan pa an yak a=ye hi	冬六年、夏六年そうしていたと
a=nu kor an=an korka	聞いていたが
asinuma anakne a=pirkesehe, a=pirpakehe	私は傷の上端、傷の下端が
iramamakaka pirka p ne kusu	きれいに治ったので
teeta nanka, teeta sirka a=i=ekote wa	もとの顔、もとの姿を取り戻して
an=an ruwe ne korka	暮らしていたのだが
nenokunne hene tokap hene	彼はそのまま夜も昼も
pirpakehe, pirkeseke ukotattatce p ne kusu	傷の上端、傷の下端が膿んだので

²⁹ a=mimtar²⁹ : 発音としては a=mimtar^o のように聞こえるのだが、語幹の最後の母音 a に対して、所属形接尾辞が -o となる例は par 「口」以外に無いので、ここでは mimtar^o と言おうとして -o になってしまったと解釈しておく。

³⁰ a=ossikeop a=honihi a=orarpa sekora hene ya : a=ossikeop a=honihi a=orarpa までは「私のはらわたを私の腹に押し込んだ」ということだと思われるが、その後の sekora he ne ya 「ということか？」というのは、地の文ではなくて白沢氏の感想か？

³¹ seta or peka, cikap or peka inu=an : 直訳すれば、「犬のところを、鳥のところを（通って）聞く」ということで、「風の便りに」という日本語の表現をもじって「犬の便りに、鳥の便りに」と訳した。

esirkaoma wa an yak a=ye hi a=nu kor	寝たきりになっていたと聞き
seta or peka, cikap or peka	犬の便りに、鳥の便りに
a=nu kor an=an ayne <ne>	聞いているうちに
tane anakne "pirka ruwe ne."	もう「治った」
sekor kane hawas korka <ka>	という話だが
sak pa iwan pa mata iwan pa	夏六年、冬六年
kasi ehotke ayne <ne>	傷の上に寝たあげくに
"pirka ruwe ne" sekor hawas ruwe ne yakun	「治った」という話ならば
asinuma anakne <ne> itto terke ta itto terke ta	私は日ごと夜ごとに
a=pirkesehe, a=pirpakehe euciw wa <wa>	傷の上端、傷の下端がくっついて
pirka wa an=an ruwe ne yakun	治ったのだから（私の勝ちだ）
sekor yaynu=an kor an=an ruwe ne ayne	とあって暮らしているうち
konto pirka katkemat a=etun hine	美しい女性を妻にして
a=sukere wa ipe=an kor an=an ruwe ne. <ne>	料理をしてもらって食べていた。
tane ta pakno anakne sinen a=ne wa	今の今まで独り暮らしで
orowa suke hene nep hene opitta	料理だろうと何だろうとぜんぶ
yaykata a=ki p ne a korka	自分でやっていたのだが
pirka pon katkemat a=etun w_a a=kor akusu	美しい若い女性を妻として持つと
nep enepo arikiki wa sirki ya ka a=eramuskari.	何と働き者であるかわからないほどだ。
osoro sirka ta anu siri ka isam no ³² <no>	お尻を地面につけもしないで
toyta hikeka, usa aepi poronno	畑仕事をして、食料をたくさん
tu pu epuni, re pu epuni wa	ふたつの倉、みつつの倉を建て
pu epuni patek ki katkemat	倉を建ててばかりいる奥さんを
a=kor wa an=an ruwe ne ayne <ne>	私は持って暮らしているうちに
a=eyaykotuymasiramस्या wa	よく考えて
inu=an ³³ awa <wa>	みると

³² osoro sirka ta anu siri ka isam no : 「お尻を地面に置く様子もなく」。言うまでもなく、座って休むこともしないで働き続けるという、働き者であることを表す常套句である。

³³ inu=an : inu は「聞く」「嗅ぐ」「味わう」「感じる」など、視覚以外のすべての感覚について、それを得ることを表す動詞である。「～を試みる」と言うときに、**wa inkar** 「～して見る」という言い方も使われるが、それは **ihunara wa inkar** 「探してみる」のように視覚的にとらえられるような状況の場合に限られ、この例のように「考えてみる」のような内部感覚的な行為につ

teeta kane a=unuhu a=onaha okay ruwe ne hine	昔は私にも母や父がいて
a=onaha ... a=onaha turesihi <si>	父の妹が
Iskar ... Iskar un kur a=ekoknu wa	イシカラ人に嫁いで
Iskar ... Iskar or_ ta an ruwe ne hine	イシカラで暮らしていて
a=onaha から umaretaro p a=ne	父から生まれた私と
a=onaha mataki から umaretaro	父の妹から生まれた
pon Iskar un kur ne an pe	若イシカラ人であるものが
ueramus kari wa ukoyki katu ne ruwe ne	お互いにそれと知らずに戦った
sekor kane yaykotuymasirasuypa=an w_a	ということであったということが、
inu=an akusu <su> a=eramuan wa kusu	考えてみてわかったので
orowano wen iyokunure toy iyokunure	そこでおおいに驚いて
a=ki kor an=an ruwe ene an h_i ne korka	いたのだが
newaan aynu orowano a=nukar ka eramuskari.	その男は、それ以来見ることもなかった。
“tane unukar sinot unukar ne kusu	「この出会いは遊びの出会いだから
konto unukar sonno unukar	今度会った時が本当の出会い
sino unukar_ ne ruwe ne na.”	真の出会いだぞ」
sekor hawean kor uekohoppa=an pe ne a korka	と言って別れたのだが
orowano i=nukar ka ek ka somo ki	それ以来私に会いにも来ない
arpa=an ka somo ki p ne kusu	私も行きもしなかったので
a=nukar ka somo ki no oka=an akusu	会うこともなく暮らしていたところ
a=macihi menoko po ka	妻は女の子も
okkayo po ka poronno kor wa	男の子も大勢産んで
orowano <no> okkayo ne hike	男の方には
okkayo monrayke a=epakasnu.	男の仕事を私が教えた。
menoko ne hike	女の方には
a=macihi menoko monrayke	妻が女の仕事を
epakasnu <nu> kor	教えながら
oka=an ruwe ne korka	暮らしていたけれど

いては、wa inu を用いる。wa inkar のような構文が、日本語の「してみる」の直訳であるように書かれているものがよくあるが、このような使い分けの存在を考えると、日本語の直訳によって生まれた構文とは考え難い。

nep a=e rusuy nep a=kor rusuy ka	何を食べたいとも何を欲しいとも
somo ki no okay	思わずにいる
Sinutapka un Poyyaunpe a=ne ruwe ne wa	シヌタブカのポイヤウンペで私はあり
tane anakne a=poutari ka rupne <ne> kusu	今は子供たちも大きくなったので
ekimne ... yaykata ekimne=an somo ki yakka	自分で山に狩に行くこともないが
ekimne pa wa yuk kam hene	子供たちが山へ行って鹿肉でも
kamuy kam hene eawnarura	熊肉でも獲ってきてくれる。
cepkoyki kor, cep ne yakka poronno	魚を捕ると、魚もたくさん
pirka hike se wa arki wa	良いのを背負ってきて
opokin ipe=an kor an=an ayne <ne>	次々食べて暮らしているうちに
orowano a=akihi ³⁴ a=hunara ka somo ki	弟を探すこともなく
i=hunara ka somo ki	向こうも私を探しもしないで
i=hunara ka eyayekatuwen w_a	私を探すこともきまりが悪くて
i=hunara ka somo ki	向こうも私を探さず
a=hunara ka somo ki	私も探さなかった
Sinutapka un Poyyaunpe nispa	シヌタブカのポイヤウンペ様で
a=ne ruwe ne wa <wa>	私はあり
tane anakne tapne kane ne ruwe ne sekor an pe	今は、こういう次第だということを
a=pohoutari a=epaskuma kor ... wa	子供たちに教えて
Iskar un kur a=irwaki turano	自分の兄弟であるイシカラ人と
naanipakne uronnu=an pe a=ne ruwe ne a korka	もう少しで殺し合うところだったが
tane anakne a=nukar ka somo ki	もはや私は会うこともない。
i=nukar ka somo ki no	向こうも私に会いに来ることもなく
usempir_ ta ³⁵ onne kuni p a=ne ruwe ne wa	疎遠なまま年をとることになって
oka=an ruwe ne kusu	いるので
a=pohoutari nu wa ... nu kusu ne na	子供たちよよく聞くのだよ
sekor kane itak=an kor <kor> an=an.	と言いながら暮らしていた。
pirka ipe=an kor an=an ayne	おいしいものを食べながら暮らし

³⁴ a=akihi : 若イシカラ人のことを指している。

³⁵ usempir_ ta : u- 「互いの」 sempir 「陰」。すなわち「お互い見えないところで」という意味。

tane anakne <ne> onne nispa
a=ne ruwe ne kusu
tapne an pe aresikup³⁶ or_ ta
uirwakne ukoyki=an w_a
a=rayke ka niwkes, i=rayke ka niwkes.
uekohoppa a=ki wa
orowano i=nukar ka somo ki
ek ka somo ki, arpa=an ka somo ki
nispa utar a=ne wa oka=an ruwe ne kusu
a=pohoutari a=epaskuma hawe ne na.
sekor itak=an kor
onne nispa a=ne ruwe ne.

もはや年老いた長者に
私はなったので
このように人生の途中で
兄弟で戦って
倒すことも、倒されることもできず
お互い分かれて
それいらい向こうが会いに
来ることもなく、私が行くこともない
そういう長者たちで私たちはあるので
子供たちに教えておくのだよ。
と言いながら
天寿を全うした長者で私はあった。

(なかがわ ひろし・千葉大学名誉教授)

³⁶ aresikup : 実際にはこのように発音しており、別の話の中でもこのように発音していることが多いが、本人の説明では **arsukup** が正しい形だと言い、意味としては「17、8歳前後の年齢を指すのだと思う」(N9109211FN) と述べている。

Ainu Folklore Text-20
Nabe SHIRASAWA's *yukar irupaye*
The Duel with his Own Brother from Iskar

NAKAGAWA Hiroshi

Summary:

This tale was told by late Ms. Nabe Shirasawa and recorded by Hiroshi Nakagawa on 4th April, 1988. It is called *yukar irupaye* “prose tale of heroic epic”, which has been the women’s style of narration of the genre which was usually recited in verse by men. This tale was handed down by her father Sanrekite Oyamada.

Outline of text:

I am Poyyaunpe from Sinutapka. I lived by myself and a good hunter. One day I killed an especially big bear and was dismantling it, when from the sky a man ran down with a roaring sound. I hadn’t seen him, but I realized he was the young Iskar man. He came by me and said, “This bear must be my prey, but you got in my way!”

Since I pretended I couldn’t hear his voice, he got mad and tried to hit me with a club, but I avoided his attacks with hiding into the bear’s body. Then I tore the bear’s intestines and tossed the shit into his face. He got angry, then pulled out his sword and attacked me with it. I also pulled my sword and fought him. We continued to fight but neither I couldn’t kill him, nor he couldn’t kill me.

Finally, he demanded me to fight by cutting stomachs each other. I accepted it and stood by the big fraxinus. He cut me in the stomach, and I cut him in return, but neither I nor he killed the rival. Then he jumped on the whirlwind saying that this time was a false encounter and next time should be a true encounter, then he returned to his home. I, too, returned home on the wind.

Soon after my wounds healed completely but I heard the young Iskar man had been bedridden for a long time. I realized he was the son of my father’s sister. Thereafter, however, there was no chance we met each other again, in spite of his words “next time should be a true encounter.” I married a beautiful and hardworking woman. I got many boys and girls, who became good hunters and good housewives. I told this story to my children before I die.